

## ■学会報告： ジョウゼフ・コンラッド協会(英国)第 45 回大会 Writtle University College, 5-7 July 2018

設楽靖子

イギリス・コンラッド協会主催の第 45 回年次大会は、2018 年 7 月 5 日～7 日、エセックスのチェルムズフォード(Chelmsford)市にある Writtle University College にて開催された。Chelmsford とは聞き慣れない地名だが、London Liverpool Street 駅から Great Anglia 線で 1 時間弱、ロンドンとコルチェスターのほぼ中間に位置する。ここがコンラッド学会の開催地となった理由は、「コンラッドが結婚後に最初に住んだ町に近い」という紹介がサーキュラーに載っていたが、あえて言えば会員の一人の Tim Middleton 氏が当大学の副学長という縁によるようである。園芸学科を持つキャンパスは緑が美しく、また大都市よりも宿泊しやすく、かつロンドンから日帰りも可能で、開催地としては好条件であった。本報告では、3 日間の学会プログラムを簡略に振り返り、加えて、その後に個人で寄ったポーランド文化協会 (POSK) と Stanford-le-Hope について追記する。

学会プログラムは、発表点数をみると、1 日目が 2 セッションで 6 点、2 日目が 5 セッションで 13 点、3 日目が 3 セッションで 6 点、計 25 点という構成であった。参加者は、予想どおり、ヨーロッパからの参加者の割合が多かった。

まず、第 1 日目の第 2 セッション“Pushing Boundaries”では、William Atkinson 氏が、“Yet again, Achebe and ‘Heart of Darkness’: A post-humanist rethink”というタイトルで、アチェベが提起した問題が形を変えながらも継続して論じるに値するものである様を概観した。また、このテーマをめぐる最新の文献リストも配布・共有された。

2 日目の第 1 セッション“Empire and Beyond”では、Debra R. Baldwin 氏が、Edward Noble（船員経験をもつ同時代作家）に注目し、ヴィクトリア朝 sensational novels として Noble の *Shadows from the Thames* などを取り上げ、sensational と括られる小説が実は complexity of human soul の要素を持ち得るというパラドックスを、コンラッドとの比較で論じた。第 2 セッション“Images of Conrad”では、ポーランドの Daniel Vogel 氏がスタニスワフ・レ

ム(1921-2006)の SF 小説『宇宙飛行士ピルクス』の主人公を“Conradian captain”と位置づけ、*The Shadow-Line* での船長 vs 船員の関係との類似を論じながら、作品中にはピルクスが「コンラッドを読む」という直接言及があることも指摘した。このあたりはポーランドの研究者の本領発揮であろう。次いで、Agnes Adamowicz-Pospiech 氏は、ポーランドにおける文化的ブランドとしてのコンラッド像を論じ、国内でのコンラッド受容の変遷を論じた。第3セッション“Rethinking ‘Heart of Darkness’”では、奥田洋子氏が、“Heart of Darkness”を「感情」(emotions)という観点から読み直し、まず、Marlow が人間の感情をどのように理解しているかを検証し、次に、Marlow によると Kurtz の“ideas”も実は感情に根源があることを論じ、最後に、Marlow が Kurtz の影響力を逃れて自分自身の感情に目覚めるまでの過程を分析した。

3 日目の意味深長に名付けられた第1セッション“Lost in Translation”では、Ewa Kujawska-Lis 氏が、“Heart of Darkness”のポーランド語訳を1930年の初訳から辿り、2017年のポーランド人作家 Jacek Dukaj による新訳ならぬ「書き直し版」に焦点を当て、これが「1899年の原著への輸血 transfusion」を意図した作品であることを紹介した。また、Jeremy Hawthorn 氏は、3人称のナラティブが登場人物に入り込む様を“Typhoon”などからの具体的引用で示した。第2セッション“Textual Spaces”では、Joanna Skolik 氏が、コンラッドが結婚後に最初に住んだエセックスの Stanford-le-Hope を紹介し、その場所と作品との関わりの重要性について書簡などを引用しながら検討した。トリの発表としては、Yael Levin 氏が、“How, Why, Watt: Conrad, Beckett and the modernist witness”というタイトルで、ベケットの小説 *Watt* (1953年)とコンラッドの *Lord Jim* を交互に引用しながら、モダニズム研究におけるこの比較の重要性を論じた。

発表以外では、エクスカーションとして、1日目の夕食時に、会場から貸し切りバスで40分ほどの北海へ注ぐ河の河口にあるマルドン(Maldon)という町へ移動し、そこの海浜公園を起点に sailing barge に乗船してクルーズするという行事があった。Maldon はテムズ河とは別の水系の河口に位置し、1930年代までは平底帆船(barges)が小麦などをテムズ河経由でロンドンへ運搬する際に活躍していたとのことで、その役割を終えた何艘かが

## 学会報告 (イギリス)

観光船として利用されており、今回は、「河口湾に停泊したヨットの上で語り合う」というコンラッド的設定を擬似体験するという趣向であった。「潮に乗ってのぼってくる平底帆船の、赤茶色のすどく尖った三角帆の群れ」(「闇の奥」黒原敏行訳, p. 9) という描写は、このような船だったと想像された(写真1)。ゆっくり日が暮れていく中、甲板では思う存分のコンラッド談義が続き(写真2)、船内で夕食を共にした。

昨年の大会の報告に、「若手からベテランに至るまで、それぞれの世代の研究者たちが各々のなすべきことをしっかりと取り組んでいる」(伊藤正範氏)との一文があった。今回の学会では、ポーランドの研究者の存在感が大きかった印象を持ったが、この学会参加を通して、昨年同様、発表者それぞれが自身が継承する場所(文化的、社会的、歴史的観点)から、各々の問題意識で成せることに取り組み、それを国際学会で発表・共有していく姿を見ることができたと思う。



写真1  
Maldon の平底帆船(barge)



写真2  
Hydrogen 号の船上にて

[追記]

学会後に、POSK の Polish Library に寄った。学会参加者の 1 人から、この図書館の見学を勧められたからである。行ってみての成果は、2012 年に Polish Library 設立 70 周年（設立は第二次世界大戦中のロンドン亡命政府による）を記念して催された展覧会“Joseph Conrad: Polish Roots to English Writer”に合わせて刊行された冊子であった。イギリス・コンラッド協会の協力のもと、「ポーランド（人）にとってのコンラッド像」がまとめられており、Robert Hampson 氏のエッセイ“Conrad and Nationality: Conrad’s Foreignness”も載った大変有用な冊子であった。絶版だったので、コピーを入手させてもらった。

また、学会で Skolik 氏が紹介した Stanford-le-Hope へも出かけてみた。ロンドン市内の Tower Hill からテムズ河の左岸に沿って河口の Southend-on-Sea まで延びる郊外電車のルート上にあり、ロンドンから 40 分ほど。駅の近くに小さな High Street と教会があり、こじんまりとした町である。対岸にちょうど Gravesend が位置し、「霧が漂っている岸辺の低地」（前出, p. 9）に近い。少し歩けばテムズ河畔に出る。コンラッドは、この町に 1896 年 9 月末に住み始め、1897 年 5 月に農家の隣へ引越し、1898 年 10 月に The Pent へ移るまで 2 年間住んだ。実際に住んだ家は残っておらず、農家の立派な母屋のみが当時のまま残っており（写真 3）、その敷地の入り口に Blue Plaque が掛かっている。コンラッドが作家への転身を本格化し、homo duplex としての葛藤を抱えながら過ごした重要な 2 年間は、テムズ河と至近距離の場所においてであったことが現地で確認できた。



写真 3  
Stanford-le-Hope にて

（しだら やすこ 東京女子医科大学 講師）